中国浄土教における「往生伝類」の研究
――善導の位置づけについて――

山崎真純

目　次

序論　問題の所在
本論
　第一章　道綽・善導に関する記述の変遷
　第二章　捨身について
　第三章　善導における捨身について
結論
附　中国の文献における道綽・善導に関する記述

序論　問題の所在

宋代にみられる浄土教の文献において、善導は蓮社の師として挙げられている。まず宗暁が著した『楽邦文類』（一二〇〇年成立）①の「蓮社継祖五大法師伝」において、

慧遠―善導―法照―少康―省常―宗賾

（『大正蔵』巻四七―一九二c一八～一九三c二六）

とされ、また志磐が著した『仏祖統紀』（一二六九年成立）の「蓮社七祖」において、

慧遠―善導―承遠―法照―少康―延寿―省常

（同四九―二六〇c一九～二四）

として善導を蓮社の第二祖とされている。その一方、どちらも善導の師である道綽の名が蓮社の継承者としては示されていない。

そして『浄土往生伝』（九八四～九八七年以後成立）の少康伝には、

漢乾祐三年、天台山徳韶禅師、重二建其塔一至レ今高敞。時号二後善導一焉。

（筆者訓点（以下略す）・『大正蔵』巻五〇―八六七c一九～二〇）

というように、五代の後漢の乾祐三（九五〇）年になって、天台の徳韶が塔を重建し、時の人たちは、少康を後善導と号していたとされる②。また少康は、人々が一声の念仏をする毎に一銭を渡していた③事でも知られる「称名念仏の行者」である。このように「称名念仏の行者」とされる少康であるからこそ、「後善導」と呼ばれたとする向きがある④。しかし伝記の記述では、善導よりも道綽の方が「称名念仏の行者」として描かれているのである⑤。そうなると、なぜ「後道綽」ではなく、「後善導」と号されたのであろうか。

さらに道綽と善導の師弟関係について、王古の『新修往生伝』（一〇八四年成立）の善道伝⑥には次のような話を伝えている。

或問レ導曰。弟子念仏、得二往生一否。導令レ弁二一茎蓮花一、置二之仏前一。行三道七日一花不二萎悴一。即得二往生一。依レ之七日果然花不レ萎。綽歎二其深詣一。因レ請入二定観一。当レ得レ生否。導即入レ定須臾報曰、師当懺二三罪一方可二往生一。……綽公静思二往咎一。皆曰不レ虚。於レ是洗レ心悔謝訖而見レ導。即曰師罪滅矣。後当有二白光照燭一。是師往生之相也（『大正蔵』巻八二―一五八a九～c二九）

この話は、すでに『続高僧伝』（六四五年頃成立）の道綽伝⑦、『往生西方浄土瑞応删伝』（七七四年頃成立）の道綽伝⑧と善導伝⑨に説かれている話を少し改めたものである。道綽三罪の話は『往生西方浄土瑞応删伝』に初出⑩であり、『新修往生伝』においてもそのまま現れるが、蓮華が七日萎れないという話は、『続高僧伝』においては道綽の話として語られていたものが、『新修往生伝』においては、善導に依託されているのであり、ここにも道綽よりも善導を重視する傾向がうかがえる。

この善導が重視されていた問題ついて、先行研究においては二つのアプローチがある。一つは善導が国家事業に関わっていたという政治的アプローチ⑪、二つは善導の教学的アプローチ⑫からである。

私はそれらの先行研究とは別の視点より、「往生伝類」等の記述におけるそれぞれの評価から、なぜ中国において道綽よりも善導が重視されるに至ったのかを考察してみたい。それによって、道綽・善導両者の伝記上での評価がそのまま当時の中国仏教界での両者の評価を反映する一端を探る事ができるのではないかと考える。

本論

第一章　道綽・善導に関する記述の変遷

まずは道綽・善導にそれぞれに関する記述を確認しておこう（中国の文献における道綽・善導に関する記述参照）。

道綽に関する記事は、

㈠『続高僧伝』
㈡『浄土論』（七世紀半ば頃成立）
㈢『法苑珠林』（六六八年成立）
㈣『往生西方浄土瑞応删伝』
㈤『浄土往生伝』
㈥『宋高僧伝』（九八八年成立）
㈦『新修往生伝』
㈧『龍舒増広浄土文』（一一六〇年成立）
㈨『楽邦文類』・『楽邦遺稿』（一二〇四年成立）
㈩『仏祖統紀』

等にみられる。

一方、善導に関する記事は、

Ⓐ『続高僧伝』

Ⓑ『法苑珠林』
Ⓒ『大唐西域求法高僧伝』（六九一年成立）
Ⓓ『往生西方浄土瑞応删伝』
Ⓔ『浄土往生伝』
Ⓕ『宋高僧伝』
Ⓖ『往生西方略伝』（一〇一七年成立）
Ⓗ『新修往生伝』
Ⓘ『龍舒増広浄土文』
Ⓙ『楽邦文類』
Ⓚ『仏祖統紀』

等にみられる。

まず両者が現れる著作に関して述べると、凡そ同じ著作にその記事がある。そのため、著作の相違から何かの区別を見出すことはできない。次にそれぞれの道綽、善導に関する伝記を比較すると、これらの伝記を時代順に並べたとき、戒珠『浄土往生伝』を境に、道綽と善導の伝の分量に興味深い変化をみることができる。すなわち、『浄土往生伝』以前は、善導伝よりも道綽伝のほうがより多くの分量が記述されるのに対して、『浄土往生伝』以後は、それが逆転し、道綽よりも善導の伝記の方がより多くの分量が記述される傾向がみてとれるのである。その上で『楽邦文類』や『仏祖統紀』では善導を蓮社の第二祖としてとらえているのであり、その意味においても『浄土往生伝』以後、善導の重要度が増したと言う事ができる。『浄土往生伝』とは三巻より成り、慧皎の『高僧伝』（五一九年成立）・『続高僧伝』はじめその他十家の撰述せる伝記である。[13] 収められている往生者の具体的な数を示すと、上巻には西晋以来の往生人一九人の伝と附見一二人、中巻は初唐代の二〇人と附見四人、下巻は中唐以後五代までの一七人と附見三人である。

ではなぜ、『浄土往生伝』以後、道綽と善導に関する記述の分量が変化しているのであろうか。ここで『浄土往生伝』の善導伝を取り上げる。

釈善導、不レ原二其姓一。亦不レ悉二何許人一。周二遊寰宇一、求二訪道津一。唐真観中、見下西河綽禅師上、行二方等懺一及浄土九品道場上。導大喜曰。此真入レ仏之津要。吾得レ之矣。於是篤勤精苦、若レ救二頭然一。続二至京師一、撃二発四部弟子一、無レ間二貴賤一、彼屠沽輩、亦撃悟焉。嘗写二弥陀経一数十万巻。散施受持以故、京師至二于左右一、列レ郡下念二経仏一者上。踵二迹而是一。或問レ導曰。念仏之善生二浄土一耶。対曰。如二汝所念一、遂二汝所願一。対已導乃自念二阿弥陀仏一。如レ是一声、則有二一道光明一従二其口一出、或其十声至二于百声一。光亦如レ之。導厭二此身一諸苦逼迫、情偽変易、無二暫休息一。乃登二所居寺前柳樹一、西向願曰。願仏威神驟、以接レ我。観音勢至亦来助レ我。令下我此心不レ失二正念一、不レ起二驚怖一、不丙於弥陀法中以生乙退堕甲。願畢於二其樹上一投身自絶。時京師士大夫、傾レ誠帰信、咸収二其骨一以葬。高宗皇帝、知二其念仏口出二光明一。又知二捨報之時精至一如レ之。下勅二以レ額其寺一為二光明一焉。

（『大正蔵』巻五一―一一九a二五～b一三）

この記述の中で、注目すべき点は、善導が樹の上より飛び降り、そのまま捨身往生をしたという所である。この捨身往生説ついては、『浄土往生伝』に先行する道宣の『続高僧伝』にも記述がある。

時在二光明寺一説法、有レ人告レ導曰。今念二仏名一。定生二浄土一不。導曰。念仏定生。其人礼拝訖、口誦二南無阿弥陀仏一。声声相次、出二光明寺門一。上二柳樹表一、合掌西望、倒二投身下一、至レ地遂死。事聞二台省一。

（『大正蔵』巻五〇―六八四a一五～一九）

『続高僧伝』の記述では、長安の光明寺において善導が念仏を勧めると、ついに柳の樹より捨身往生する人が出て、それが当時の政府の役所（台省）まで聞こえたという。後代の『浄土往生伝』以後の善導伝では、これを善導自身のことと理解されている。

善導の捨身往生説については、史実として否定的な見解が提示されている[14]。その理由として、第一に、善導の最古の伝が載せられる『続高僧伝』から三〇〇年以上も経過した『浄土往生伝』に至って初めて善導の捨身往生が語られていることが挙げられる。その間に成立している『法苑珠林』・『大唐西域求法高僧伝』・『往生西方浄土瑞応删伝』では善導の捨身往生は全く触れられていない。

第二に、『往生西方浄土瑞応删伝』の懐感伝にある善導と懐感の対話に善導が自絶行為を誡める内容を述べていることが見られることが挙げられる。その対話を挙げると、

問二善導和尚一曰。念仏之事如何門。答曰。君能専念仏、当二自有レ証。又問。頗見レ仏否。師曰。仏語何可レ疑哉。遂三七日入二道場一、未レ有二其応一。自恨二罪深一故絶レ食畢レ命。師止而不レ許。

（同五一―一〇六a九～一二）

と示されている[15]。懐感が、師・善導の教えを受けて、見仏するために念仏に励んだが、三週間続けても見仏することができなかった。そのため、懐感は自身の罪が深い事を恨んで、食を断ち、自らの命をも断とうと試みるが、善導はそれを許さずに止めたという。このように善導は、弟子である懐感の自絶行為に反対したにも拘わらず、善導自らは捨身したとは考えられない。以上の二つの理由を挙げて、善導は自ら捨身往生を行わなかったとされる[16]。

しかし一方、『浄土往生伝』で初めて善導が捨身往生したとされ、それ以後、善導＝捨身往生した仏教者、という事が中国仏教界において定着してしまった事も否定できない事実である。では、なぜ善導が捨身往生したとしなければならなかったのか。それについて考察する前に、まず捨身とは何かについて次章で考えてみたい。

第二章　捨身について

捨身とは、自利的内容の捨身供養と利他的内容の捨身施与に分けられる。捨身供養とは、自らの求道に対する決意として、その身をもって供養することを意味し、捨身施与とは、他の救済のために、その身を施与すること指す[17]。中国では『金光明経』「捨身品」[18]・『大般涅槃経』「聖行品」[19]・『妙法蓮華経』「薬王菩薩本事品」[20]に説かれる

経説が多大な影響を与えたとされている。[21] 特に『妙法蓮華経』「薬王菩薩本事品」の文を示すと、

以二天宝衣一、而自纏レ身。潅二諸香油一、以二神通力願一、而自燃レ身、光明遍照二八十億恒河沙世界一。其中諸仏同時讃言。善哉善哉。善男子、是真精進。是名二真法供養如来一。若以二華香・瓔珞・燒香・末香・塗香・天繒・幡蓋及海此岸栴檀之香一、如是等種種諸物供養、所不レ能レ及。仮使国城妻子布施亦所不レ及。善男子、是名二第一之施一。於二諸施中一最尊最上。以二法供養諸如来一故、作二是語一已而各黙然。其身火燃千二百歳。過レ是已後其身乃尽。一切衆生悪見菩薩、作二如レ是法供養一已、命終之後、復生二日月浄明徳仏国中一。於二浄徳王家一、結加趺坐忽然化生。

（同九―五三b八～二〇）

である。この中の「是名二第一之施一。於二諸施中一最尊最上」の一節が、後の行者の大きな影響を与え、捨身が広く実践され、定着する要因となっていったのである。

そしてその捨身の種類としては、①焼身、②施身、③降損、④投身、⑤断割、⑥絶食、⑦絞縊、⑧入水の八種類が挙げられる。その数をいえば、焼身が多数を占め、施身、降損がその次であり、その後は投身と断割が同数ぐらいで、絶食、絞縊、入水はわずかである。[22] その中で、投身による捨身往生については、『続高僧伝』では忘名[23]と法充、[24]『宋高僧伝』では、志通[25]が行っている。

また捨身自体が伝記の上で伝統的に高い評価を受けていることは、僧伝を見ても明らかである。僧伝の中で最も古く、『高僧伝』巻一二には「亡身」（捨身）の高僧として一一人（曇称・法進・僧富・法羽・慧紹・僧瑜・慧益・僧慶・法光・曇弘）を挙げ、次の『続高僧伝』巻二七には会通を含めて一二人（法凝・僧崖・普圓・普済・普安・大志・玄覧・法曠・会通・紹闍梨・道休）の正伝のほかに、二人の付伝を記しており、さらに『宋高僧伝』巻二三になると、二二人（僧蔵・正寿・無染・定蘭・鴻休・全豁・元慧・東草師・行明・息塵・道育・景超・志通・道舟・洪真・慧明・普静・守賢・師蘊・紹巖・文輩・懐徳）の正伝の他に、二人の付伝を記した二四人の遺身の高僧をあげている。この点について名畑応順氏は、

宋初に於ける捨身の風は勿論天台に限ったわけでなく、やはり世俗一般の好尚であった[26]

と述べ、捨身という実践行が一つの嗜好・流行となっていたとするのである。つまり戒珠の生きた時代も同様に多くの僧侶が捨身という実践に励んでいたことが窺える。また川勝守氏は『高僧伝』・『続高僧伝』・『宋高僧伝』での捨身往生の特徴を挙げ、

『続高僧伝』遺身篇には焼身供養や虎狼施食などのあまりにも生々しい捨身の事例は少なくなっていることが言える。遺身篇末尾の論に曰く、「密かに聞く、生を軽んじ節に殉じるは、古より難と為す」なのである。梁『高僧伝』の時代に比較して、『続高僧伝』の時代は中国社会が安定を取り戻したかに見える。

…（中略）…『宋高僧伝』は道宣の『続高僧伝』に比較して、

焼身供養や捨身飼虎の事例が増加しているのは唐末五代の動乱時期のためであろうか。[27]

と述べ、時代の変遷と「高僧伝類」の捨身往生の事例の関係性を挙げ、『宋高僧伝』においては動乱時期も重なって、焼身や施身の事例がより高まったとする。これに乗じて、捨身往生への需要も高まったと言う事ができる。これは、宋代になって捨身に対する評価が一層高くなったことを物語っていると見てよいのではないだろうか。

しかし一方、捨身については否定的な考え方も見受けられる。『唐令』の「僧尼令」第七に「凡僧尼不レ得二焚身捨身一」[28]とあり、唐代の律令規定において捨身を行うことは否定されている。また念常の『仏祖歴代通載』（一三四四年成立）によれば、貞観九年（六三五）に以下の詔が令されている。

比聞下多有二僧徒一、溺二於流俗一、或仮二託鬼神一、妄伝中妖怪上。或謬二称医巫一、左道求レ利、或灼二鑽膚体一、駭二俗驚愚一。或造二詣官曹一、囑二致贓賄一。（『大正蔵』巻四九―五六九b二七～c一）

この詔によると、近頃僧徒が民衆の中に入りこみ、鬼神の言に託して妖妄の事を説き人々を惑わせ、或は呪い札といったでたらめな医術で利を求め、或は皮膚を傷つけ指を焼くなどして人々を驚かせ、或はまた官曹に至って賄賂を贈って嘱請するといったような僧徒としてあるまじき行為をし、これらを許すべきでないとしている。

事実、このような捨身が行われていたとすれば、経典の教えからすれば仏に自らの身を捨て供養したり、また自らの身を犠牲にして他を救うといった事が、最高に尊い行為であったとしても、国家からすればこれは俗人を驚かせ惑わせる行為として禁じられたものであったという事ができる。そして『唐律疏議』（巻二五）「詐偽律」に、「諸詐二疾病一、有レ所レ避者、杖一百、若故自傷残者、徒一年半」[29]とあり、病と詐って避けた者には杖一百、もし自らの身を傷つけて避けた者には、徒一年半とする事が述べられている。つまり自らの身を傷つけるという事に対して、国家が犯罪行為とみなし、罰を設けていたのである。[30]

『高僧伝』・『続高僧伝』・『宋高僧伝』等の僧伝で、捨身者が段々と増加されているという事は、捨身を行う仏道者は一定の高評価を受けていたと考える事ができる。それに対して、国家側の対策としては捨身で己の身を傷つけることが禁止されていた。この矛盾を考える場合、はたして善導の捨身往生は評価されたのか否か、その問題について次章にて述べていく。

第三章　善導における捨身について

善導自身が捨身往生をしたことは、『続高僧伝』以下、唐代の「往生伝類」には一切記載されないものであり、戒珠の『浄土往生伝』において初めて現れるのである。では、善導の捨身往生を戒珠がどうして説いたのかということになるが、前章の捨身における肯定的な評価と否定的な評価の両方面より考察せねばならないだろう。

肯定的な評価としては、捨身に対する高い評価が伝記の上でも伝

統的にあり、それが戒珠自身の善導への讃仰とあいまって、善導の死を脚色したものではないかと考えるものである。『続高僧伝』にある善導の教説を聞いた者の捨身について、『続高僧伝』にある善導の教説を聞いた者の捨身について、塚本善隆氏は

光明寺の門前柳樹称名自殺事件は、朝野に聞こえひろまり、善導の浄土指導者としての名を長安中に急速に著名した。（仏にみずからの身命を捨てて供養することは、当時最高の尊い信仰とされていた。[31]）

と述べられ、また牧田諦亮氏は

そういう事（自殺事件）が極めて珍しく、奇特なことであると言うので、宮中にその事が伝えられたと、書いてある。この時分でありますから、宮中に町の出来事が達せられるという事は、相当大きな出来事であったに違いないし、本当に決心して飛び降りた、善導の教を実践した人が、既に大師の存命中に書かれた『続高僧伝』の中に書かれてある。[32]

と述べられている。両氏の説に立つならば、決して捨身は低評されるものではなく、むしろ高評価として扱うべきもので善導はその意味でも讃仰されていたといえる。そして『続高僧伝』以下、善導に対する記述の中に、善導の入寂について記載されていないので、戒珠はこれについて何らかの説明をする必要があると考え、[33]もし善導の死を記すとすれば、それは普通の人間の死に方とは違ったものでなければならない、と戒珠は見なしたのではないだろうか。そして戒珠はすでに出来あがっていた伝説にもとづいたものか、或は戒珠自ら創案したものか明らかではないが、ともかく『続高僧伝』で記載されている善導を慕う者の捨身を、僧伝で高く評価されている捨身に重ねて、善導自身の捨身に改変したのではないかと推測されるのである。

また否定的な評価としては、国家として自らの身を傷つけることを禁止していたにも関わらず、善導の教化によって捨身者を出してしまった事は危険視されたと考えるものである。これについて諸戸立雄氏は、

光明寺門前での投身自殺事件も、政府では崇高な捨身行為としてではなく、世間を騒がせた違法行為とみなければならぬ性質の事件であったと考えられるのである。この事件について「事台省に聞こゆ」とあるが、これは奇得な事として宮中に達したのではなく、世間を騒がせた事件として中央政府（台省）にまで達したと見られるのである。[34]

と述べられている。つまり善導は国家の仏教政策に反する行動（この場合では捨身を勧めた事）をとって、要注意人物として警戒されたというのである。では何故、その善導に対して『浄土往生伝』では捨身を附属しているのか。それは『浄土往生伝』という書物の性質自体にあると考えられる。先ほども述べたが、『続高僧伝』以下、善導に対する記述の中に、善導の入寂について記載されていない。しかし『浄土往生伝』という以上、浄土に往生した者の没相の様子

を記載せねばならない。現に往生者、亡くなっている者のみが記載され、往生していない、亡くなったかどうか分からない者は記載されていないのである。その中で、善導一人を記載しないわけにはいかないので、やむをえず捨身往生した善導という形にしたのではないだろうか。つまり苦肉の策という形で捨身往生した善導となったわけである。

いずれにせよ、これまでは戒珠が『続高僧伝』における信者の捨身を善導自身の事と誤って解したと見る向きが多い。しかし戒珠が道宣の記事を誤読したのではなく、戒珠の見識にもとづく改変脚色と考えられるのである。そして以後、「往生伝類」においては道綽よりも善導が重視される要因の一つになったのではないかと考えられるのである。

結　論

以下これまで見たことをまとめる。僧伝にみられる道綽・善導における記事を概観すると、『浄土往生伝』以後、道綽・善導の記述量の関係に変化がみられた。その理由の一つとして、善導が捨身往生をしたという記事が付されるようになったからではないかと考えた。それについては肯定的な評価と否定的な評価が考えられるが、どちらにせよ、後代において善導と道綽の評価を転換する一因とされたのではないだろうか。さらにそれ以降では、遵式が善導弥陀化身説を示している。遵式著作の『往生西方略伝』は現存しないが、王日休の『龍舒増広浄土文』の中にその引用がみられる。

本朝慈雲式懺主略伝云。阿弥陀仏化身至二長安一。聞二滻水声一乃曰。可二教念仏一。三年後満二長安城中念仏一。後有二法照大師一。即善導後身也　（『大正蔵』巻四七―二六七a四～七）

善導が弥陀の化身となって長安に現れて念仏を広め三年で市中に念仏の声が、満ちたというのである。佐藤成順氏は「これが善導を弥陀の化身とする説の最も早い事例であろう」[35]としている。

また王古の『新修往生伝』に「欣二恵遠法師勝躅一、遂往二廬山一観二其遺範一」（『続蔵』巻七八―一六四b四～五）と善導が慧遠の勝れた行跡を慕って廬山を訪れたことを記している。これについても佐藤成順氏は

この善導の廬山訪問の話を書いたのは、『新修往生伝』の選者王古が最初であり、この話は、慧遠と善導を結びつける意図で作られたと推測されるのである[36]

としている。なぜこのように述べられるに至ったかについての検討は、今後の課題としたい。（了）

註

① 文献の成立年代については全て、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版・一九九八年）の記載に拠った。

② 『宋高僧伝』の少康伝（『大正蔵』巻五〇―八六七c一九～二〇）や『新修往生伝』の少康伝（『続蔵』巻七八―一五八a一七～一八）等にも同様の記述が見える。

③『大正蔵』巻五〇―八六七ｃ五～七

④ 佐藤成順氏はそれについて、

善導を崇敬し、念仏を継承した少康は「後善導」と呼ばれていたのである

（『善導の宗教―中国仏教の革新―』・浄土宗出版・二〇〇六年、二一四頁）

と述べている。

⑤『続高僧伝』の道綽伝（『大正蔵』巻五〇―五九四ａ一〇～一二）、『浄土論』の道綽伝（同四七―九八ｂ一一～一七）、『浄土往生伝』の道綽伝（同五一―一一八ａ二三～二八）に道綽が小豆念仏を行っていたとの記述がある。ちなみに、数量念仏をはじめて修していたのは道綽であるとする指摘がある。（韓普光著『新羅浄土思想の研究』・東方出版・一九九一年・五二九頁～五三〇頁）

⑥『新修往生伝』は全三巻であるが、現存しているのでは上巻と下巻であって、中巻は散佚して伝わらない。そしてその中巻に善導の伝記があるとされ、それが法然の「類聚浄土五祖伝」に引用されているのである。そのため、この文は『黒谷上人語灯録』巻九所収である「類聚浄土五祖伝」からの引用である。そこには二種類の善導伝を並記するという形になっている。しかし、良忠の『観経疏伝通記』巻一によると、

謂新修伝中巻挙二三十三人一中、第二十五善導。第二十六善道、是似二一人一。

（『大正蔵』巻五七―四九八ｃ一四～一五）

とある。つまり中巻には三三人の伝記を収め、その第二五に善導、第二六に善道をあげているというが、これは法然が引用している二種の善導伝が元々『新修往生伝』では善導伝と善道伝との二伝であった事を示している。

そして良忠は、『新修往生伝』の善導・善道を挙げた上で、

問。第二十五・六両師為レ同為レ異。答。如レ伝者雖レ為二別人一、看二其行儀一定是一人。

（同五七―四九九ｂ二～三）

と一人説を提唱し、その後に善導と善道の「三異十一同」（三異：一導・道音異、二滅日異、三滅相異であり、十一同：一時代同、二師範同、三行経同、四得定同、五懺悔同、六白光同、七写変相同、八専修同、九精進同、十入滅年同、十一入滅月同）を挙げている（葵翁著『集成光明善導大師別伝纂註』巻上（村上勘兵衛刊・一六八〇年、一丁左～二丁右）、境野黄洋著『支那仏教史綱』（森江左七刊・一九〇七年、二一二頁）、薗田宗恵稿「善導大師の伝記に関して」（『六條学報』第一五七号所収・一九一四年、一〇頁）参照）。

また二人説とは、塚本善隆氏が『金石萃編』所収の「大唐実際寺故主懐惲奉勅贈隆闡大法師碑銘並序」（『金石萃編』巻八六（『石刻史料新編』第二冊（新文豊出版公司・一九七七年）所収・一四五七～一四六一頁））・「大唐龍興大徳香積寺主浄業法師霊塔銘並序」（『金石萃編』巻七五（同・一二八〇～一二八一頁）所収）・「河洛上都龍門之陽大廬舎那像龕記」（『金石萃編』巻七三（同上・一二五四～一二五六頁）所収）の史料を挙げ、これらの石碑を考察することによって、善導と善道とは元来二人であったが、後に至ってその区別が無くなったのではないかという結論を出している（塚本善隆稿「金石文に見えたる善導と道綽」（『仏教学』第二巻第七号所収・一九二四年、二～一三頁）参照）。そして、成瀬隆純氏は王古と関係のあった楊傑・元照によって、善道伝は作成されたとしている（成瀬隆純稿「善導二人説の再検証」（『福井文雅博士古稀記念論集：アジア文化の思想と儀礼』所収・春秋社・二〇〇五年、六二五～六二七頁）参照。

⑦『大正蔵』巻五〇―五九四ａ五～七

⑧ 同五一―一〇五ｂ一一～二〇

⑨ 同―一〇五ｂ二七～二九

⑩ 柴田泰山著『善導教学の研究』（山喜房仏書林・二〇〇六年、七八頁）。

⑪ 藤田宏達著『人類の知的遺産一八　善導』（講談社・一九八五年、

二七～三八頁）、牧田諦亮著『浄土仏教の思想　第五巻』（講談社・二〇〇〇年、三〇～五〇頁）参照。これらによれば、「河洛上都龍門之陽大盧舎那像龕記」（前掲）・「大唐実際寺故寺主懐惲奉勅贈隆闡大法師碑」（前掲）等を出拠として挙げている。

⑫　石井教道稿「法然上人の相承観」（『仏教大学研究紀要』第三七号所収・一九六〇年、三～四頁）、香月乗光稿「法然上人における相承説の問題」（『福井博士頌寿記念：東洋文化論集』所収・早稲田大学出版部・一九六九年、二六八～二六九頁）、阿川文正稿「師資相承と浄土開宗に関する一考察」（『小沢教授頌寿記念：善導大師の思想とその影響』所収・大東出版社・一九七七年、二八七～二八九頁）参照。また柴田泰稿の「中国浄土教の系譜」（『印度哲学仏教学』第一号所収・一九八六年、一五八～一六〇頁）によれば、善導以下、『楽邦文類』・『仏祖統紀』に挙げられる蓮社の継祖は、般舟三昧の行者としての系譜であるとする。

⑬　『大正蔵』巻五一―一〇八ｃ二七～一〇九ａ七

⑭　薗田宗恵稿「善導大師の伝記に関して」（『六條学報』第一五七号所収・一九一四年、七～九頁）、岩井大慧稿「善導伝の一考察」（『日支仏教史論攷』所収・東洋文庫・一九五七年、二八三～二九六頁）、野上俊静著『中国浄土三祖伝』（文栄堂書店・一九七〇年、一六八～一七六頁）、藤田宏達著『人類の知的遺産一八　善導』（講談社・一九八五年、三九～五二頁）において詳細な研究が行われており、善導の捨身往生について史実ではないとしている。

⑮　『宋高僧伝』においても同様の記述が見られる。（『大正蔵』巻五〇―七三八ｃ一五～二〇）

⑯　藤田宏達著・前掲書、四一～四二頁

⑰　市野智行稿「善導の人間像―捨身往生についての一考察―」（『閲蔵』第五号所収・二〇〇九年、二三頁）参照。

⑱　『大正蔵』巻一六―三五三ｃ二二～三五四ｃ一七

⑲　同一二―四四九ｂ八～四五一ａ一七

⑳　同九―五三ｂ八～二〇

㉑　水尾現誠稿「捨身について―慧皎の立場―」（『印度学仏教学研究』第一一巻第二号所収・一九六三年、一七四～一七五頁）、明神洋稿「中国社会における仏教の捨身と平安」（『日本仏教学会年報』第六一号所収・一九九六年、一〇〇～一〇三頁）参照。

㉒　名畑応順稿「支那中世に於ける捨身に就いて」（『大谷学報』第一二巻第二号所収・一九三一年・二四三頁）参照。

㉓　『大正蔵』巻五〇―六八三ｃ一一～一七

㉔　同―五五九ｃ三～一七

㉕　同―八五八ｃ一二～八五九ａ一五

㉖　前掲書・二〇頁

㉗　川勝守稿「東アジアにおける捨身の文化史（一）」（『大正大学大学院研究論集』第二三号所収・一九九九年、七一～七六頁）

㉘　仁井田陞著『唐令拾遺補―附唐日両令対照一覧』（東京大学出版会・一九九七年、一〇〇九頁）

㉙　曹漫之主編『唐律疏議訳注』（吉林人民出版社・一九八九年、八五八頁）

㉚　諸戸立雄稿「善導伝についての一考察」（『東北大学東洋史論集』第五号所収・一九九二年、七五～七六頁）参照。

㉛　塚本善隆著『塚本善隆著作集』第四巻（大東出版社・一九七六年、一七八頁）

㉜　牧田諦亮著『中国仏教史研究』第二巻（大東出版社・一九八四年、三二五頁）

㉝　この点については、すでに岩井大慧氏の先行研究（前掲書・二一八三～二九六頁）が挙げられる。

㉞　諸戸立雄稿・前掲論文、七六頁

㉟　佐藤成順稿「宋代浄土教の展開―善導観に注目して―」（『浄土学』第四四輯所収、四五頁）

㊱　同・前掲書、二三〇頁

≪附　中国の文献における道綽・善導に関する記述[57]≫

著作集	『続高僧伝』（貞観19（645）年）（『大正蔵』巻50所収）
道綽に関する記述	①擁徒結**道綽**有余歎。(576c5) ②有沙門**道綽**者。夙有弘誓。友而敬奉。因喩満曰。法有生滅道悟在機縁。観相易入其門。渉空頗限其位。願随所説進道有期。満乃盱衡而告曰。積年誠業冀此弘持。縁虚無相可縁。引実有何所引。豈以一期要法累劫埋乎。幸早相辞勿塵妄識。**綽**乃退焉。其堅自持徴為若此也。(583b28～c6) ③唐并州玄中寺**釈道綽**伝九（588a20） ④**釈道綽**。姓衛。并州汶水人。弱齢処俗。圓里以恭讓知名。十四出家宗師遺誥。大涅槃部偏所弘傳。講二十四遍。晩事瓚禅師。修渉空理亟沾徽績。瓚清約雅素慧悟開天。道振朔方升名晋土。**綽**稟服神味弥積歳時。承昔鸞法師浄土諸業。便翫簡権実捜酌経論。会之通衢布以成化。剋克念縁数想観幽明。故得霊相潜儀有情欣敬。恒在汶水石壁谷玄中寺。寺即齊時曇鸞法師之所立也。中有鸞碑具陳嘉瑞事如別伝。**綽**般舟方等歳序常弘。九品十観分時紹務。嘗於行道際。有僧念定之中見**綽**縁仏。珠数相量如七宝大山。又覩西方霊相繁縟難陳。由此盛徳日増栄誉遠。及道俗子女赴者弥山。恒講無量寿観。将二百遍。**導**悟自他用為資神之宅也。詞既明詣説其適縁。比事引喩聴無遺抱。人各掐珠口同仏号。毎時散席響弥林谷。或邪見不信欲相抗毀者。及覩**綽**之相善。欲気而帰。其道感物情為若此也。会以貞観二年四月八日。**綽**知命将尽通告事相。聞而赴者満於山寺。咸見鸞師在七宝船上。告**綽**云。汝浄土堂成。但余報未尽耳。並見化仏住空天華下散。男女等以裙襟承得。薄滑可愛。又以蓮花乾地而挿者七日乃萎。及余善相不可殫紀。自非行感備通。詎能会此乎。年登七十忽然乱歯新生。如本全無歴異加以報力。休健容色盛発。談述浄業理味奔流。詞吐包蘊気霑醇醴。并勧人念弥陀仏名。或用麻豆等物而為数量。毎一称名便度一粒。如是率之乃積数百万斛者。並以事邀結。令摂慮静縁。道俗響其綏導。望風而成習矣。又年常自業穿諸木欒子以為数法。遺諸四衆教其称念。屢呈禎瑞具叙行図。著浄土論二巻。統談龍樹天親。迩及僧鸞慧遠。並遵崇浄土明示昌言。文旨該要詳諸化範。伝灯寓県歳積弥新。伝者重其陶瑩風神研精学観。故又述其行相。自**綽**宗浄業。坐常面西。晨宵一服鮮潔為体。儀貌充偉并部推焉。顧瞬風生舒顔引接。六時篤敬初不欠行。接唱承拝生来弗絶。纔有余暇口誦仏名。日以七万為限。声声相注弘於浄業。故得鎔鋳有識師訓観門。西行広流斯其人矣。沙門道撫名勝之僧。京寺弘福逃名往赴。既達玄中同其行業。宣通浄土所在弥増。今有惰夫口伝摂論。惟心不念縁境又乖。用此招生恐難継相。**綽**今年八十有四。而気明爽。宗紹存焉。(593c11～594b1) ⑤沙門**道綽**曰。経文次第。識不倶聞。(641b27～28) ⑥名行僧**道綽**曰。阿闍梨。西方楽土名為安養。可願生彼邪曰。咄為身求楽。吾非爾儔。**綽**曰。若爾可無生耶。答曰。須見我者而為生乎。乃潜息久之。(641c7～10) ⑦行至西河遇**道綽**部。(684a12～13)
善導に関する記述	①又**善導**達衆首舒暢物情。(441c19～20) ②終識苦空功由**善導（道）**。(476a21) ③時孝愛寺**導禅師**。戒行精苦耆年大徳。捨六度錫杖并及紫被贈崖。入火提為。(679a24～26) ④近有山僧**善導**者。周遊寰寓求訪道津。行至西河遇道綽部。惟行念仏弥陀浄業。既入京師広行此化。写弥陀経数万巻。士女奉者其数無量。時在光明寺説法。有人告**導**曰。今念仏名定生浄土不。**導**曰。念仏定生。其人礼拝訖。口誦南無阿弥陀仏声声相次出光明寺門。上柳樹表。合掌西望。倒投身下。至地遂死。事聞台省(684a11～19)
著作集	『浄土論』（7C 半ば）（『大正蔵』巻47所収）
道綽に関する記述	①近代有**綽禅師**。撰安楽集一巻。雖広引衆経略申道理。其文義参雑。章品混淆。(83b14～15) ②**綽禅師**検得此経。(89b23～24) ③**綽禅師**。此等臨終並感得光台異相。聖衆来迎。録在別伝。此等大徳智人。既欣浄土。(90c29～91a1) ④沙門**道綽法師**者。亦是并洲晋陽人也。乃是前高徳大鸞法師。三世已下県孫弟子。講涅槃経一部。毎常讃嘆鸞法師智徳高遠。自云相去千里県殊。尚捨講説。修浄土業。已見往生。況我小子。所知所解。何足為多。将此為徳。従大業五年已来。即捨講説。修浄土行。一向専念阿弥陀仏。礼拝供養。相続無間。貞観已来。為開悟有縁。時時敷演無量寿観経一巻。示誨并土晋陽太原汶水三県道俗。七歳已上。並解念弥陀仏。上精進者。用小豆為数。念弥陀仏。得八十石。或九十石。中精進者。念五十石。下精進者。念二十石。教諸有縁。各不向西方涕唾便利。不背西方坐臥。撰安楽集両巻。見行於世。去貞観十九年歳次乙巳。四月二十四日。悉与道俗取別。三県内門徒就別。前後不断。難可記数。至二十七日。於玄忠寺寿終。時有白雲従西方来。変為三道白光。於自房中徹照通過。終訖乃滅。後焼墳陵時。復有五色光三道。於空中現。映遶日輪。繞訖乃止。復有紫雲。三度於陵上現。遺終弟子同見斯瑞。若准経断。並是諸仏慈善根力能令衆生見如此事。又准華厳経偈説。又放光明名見仏。此光覚悟命終者。念仏三昧必見仏。命終之後生仏前。(98b6～29) ⑤如**綽禅師**。検得経文。但能念仏一心不乱。得百万遍已去者。定得往生。又**綽禅師**。依小阿弥陀経七日念仏。検得百万遍也。(102c5～102c7)
善導に関する記述	
著作集	『法苑珠林』（総章元（668）年）（『大正蔵』巻53所収）
道綽に関する記述	①唐**釈道綽**（479b27） ②唐并州玄中寺**釈道綽**。姓衞。并州汶水人也。清約雅素慧悟天開。承昔鸞師専崇習業。以貞観二年四月八日。**綽**知命将尽。通告事相。聞而赴者満于山寺。感見鸞師在七宝船上告**綽**云。汝浄土当成。但余報未尽。并見化仏住空天華下散。士女等衆以裙襟承得。薄滑可愛。又以蓮華乾地而挿者。経七日乃萎。及余善相不可殫記。至年七十忽然亂歯新生如本。全無歴異。報力増強。自非行感倫通。詎能会斯嘉応也。右一験出唐高僧傳伝（480b27～c7）
善導に関する記述	①時孝愛寺**導禅師**。(993b22)

著作集	**『大唐西域求法高僧傳』（夫授2（691）年）（『大正蔵』巻51所収）**
道綽に関する記述	
善導に関する記述	①復往襄州遇**善導禪師**受弥陀勝行。(10b25～26)
著作集	**『往生西方浄土瑞応刪伝』（大暦9（774）年）（『大正蔵』巻51所収）**
道綽に関する記述	①**道綽禪師**第十一　唐朝**道綽禪師**并州人。玄忠寺講観経二百遍。三昧七歳並解念仏。自穿橖珠。勧人念仏。語常含笑。不会面背西語善導曰。**道綽**恐不往生。願師入定為仏得否。善導入定。見仏百余尺曰。**道綽**現修念仏三昧。不知捨此報身得往生否。又問。何年月得生。答曰。伐樹連下斧。無縁莫共語。還家莫辞苦。又令綽懺悔。一者安居経像於浅処。自居安穏房中対仏懺悔。二者作功徳使出家人。対十方僧懺悔。三者因修建場傷損含生。対衆生懺悔。又問。終時有何瑞相令人見聞。答曰。亡日我放白毫。遠照東方。此光現時。来生我国。果至亡日。三道光白毫照於房内。又見曇鸞法師光。七宝池中語曰。浄土已成。余報未尽。紫雲境上三度現。(105b8～22) ②遂至**綽禪師**所問曰。(105b27～28) ③入**綽禪師**道場。(105c1～2) ④逢**綽禪師**講観経。(105c10) ⑤遇**綽禪師**講無量寿経。(106c20)
善導に関する記述	①語**善導**曰。道綽恐不往生。願師入定為仏得否。**善導**入定。見仏百余尺曰。(105b11～105b13) ②**善導禪師**第十二　唐朝**善導禪師**姓朱。泗州人也。少出家。時見西方変相嘆曰。何当託質蓮台棲神浄土。及受具戒。妙開律師共看観経。悲喜交嘆乃曰。修余行業迂僻難成。唯此観門定超生死。遂至綽禪師所問曰。念仏実得往生否。師答曰。各弁一蓮花。行道七日。不萎者即得往生。又東都英法師講華厳経四十遍。入綽禪師道場。遊三昧而嘆曰。自恨多年空尋文疏労身心耳。何期念仏不可思議。禪師曰。経有誠言。仏豈妄語。禪師平生常楽乞食。毎自責曰。釈迦尚乃分衛。**善導**何人端居索供養。乃至沙弥並不受礼。写弥陀経十万巻。画浄土変相二百鋪。所見塔廟無不修葺。仏法東行。未有禪師之盛矣　(105b23～105c8) ③問**善導和尚**曰。念仏之事在何門。答曰。君能専念仏。当自有証。又問。頗見仏否。師曰。仏語何可疑哉。遂三七日入道場未有其応。自恨罪深故絶食畢命。師止而不許。(106a9～12)
著作集	**『浄土往生伝』（雍熙年間（984～987）以後）（『大正蔵』巻51所収）**
道綽に関する記述	①如**道綽**善導者累復有焉。(108c26～27) ②唐并州**釈道綽**（114b20） ③**釈道綽**。俗姓衛并州汶水人。棄家已来。歴訪名師。後聞甕禅師理行兼著。畢志事之。尋憩壁谷玄中寺。寺即後魏曇鸞法師之旧止也。鸞於其寺。久蘊浄業。至其亡日。畳有祥異。郡人奇之。捃摭其事。刻之于碑。**綽**臨其文。弥起深信。於是依附静境。澄寂諸念。念弥陀仏。不知其数。大汎日以七万遍為度。并汾之間。風俗少事念仏。持数珠者罕。嘗有之。**綽**勉僧俗念仏。無数珠者。以豆記之。如念一声。即度一豆。或時麻麦記者亦然。已而較之。其所度者数万斛。唐真観三年四月八日。道俗集其寺。楽如来之降生也。且見鸞於空中。乗七宝船。由其船上而指**綽**曰。汝於浄土堂宇已成。但推報命未尽。爾復見化仏与化菩薩飄颺在空。衆乃驚歎。大生信服。雖夫無種闡提之人。亦率服之。以故唐初。并汾諸郡。熏漬浄業。由**綽**盛焉。**綽**有同志道撫者。久居輦下。去玄中寺。頗甚疏遠。或時相見。必指浄土為永会。**綽**亡既三日。撫聞之曰。吾常以行先之。何乃後也。又曰。吾如一息之功。見仏之期可追矣。即日於像前叩頭陳露。退就其座以化。(118a18～b9) ④唐真観中。見西河**綽禪師**。(119a26) ⑤其為潜心誘俗。与**道綽**善導諸賢近之。(120b2～3) ⑥至年九十。遇**道綽禪師**。(120c20)
善導に関する記述	①如道綽**善導**者累復有焉。(108c26～27) ②唐京師釈**善導**（114b23） ③釈**善導**。不原其姓。亦不悉何許人。周遊寰宇。求訪道津。唐真観中。見西河綽禅師。行方等懺及浄土九品道場。**導**大喜曰。此真入仏之津要。吾得之矣。於是篤勤精苦。若救頭然。続至京師。撃発四部弟子。無問貴賤。彼屠沽輩。亦撃悟焉。嘗写弥陀経数十万巻。散施受持。以故京師至于左右。列郡念経仏者。踵迹而是。或問**導**曰。念仏之善生浄土耶。対曰。如汝所念。遂汝所願。対曰**導**乃自念阿弥陀仏。如是一声。則有一道光明。従其口出。或其十声至于百声。光亦如之。**導**厭此身諸苦逼迫。情偽変易無暫休息。乃登所居寺前柳樹。西向願曰。願仏威神。躡以接我。観音勢至亦来助我。令我此心不失正念。不起驚怖。不於弥陀法中以生退堕。願畢於其樹上投身自絶。時京師士大夫。傾誠帰信。咸収其骨以葬。高宗皇帝。知其念仏口出光明。又知捨報之時精至如此。下勅以額其寺為光明焉（119a25～b13） ④蓋其独**善導**達蒙賛。(119b20～21) ⑤与道綽**善導**諸賢近之。(120b2～3) ⑥乃**善導**昔為西方化導文也。(123b19～20) ⑦遂之長安**善導**影堂。大陳薦獻。方薦獻時。倏見**善導**遺像。昇於空中。謂康曰。汝依吾事利楽有情。則汝之功同生安養。(123b22～25) ⑧今之人多指其塔。為後**善導**焉（123c16～17）
著作集	**『宋高僧伝』（端拱元（988）年）（『大正蔵』巻50所収）**
道綽に関する記述	①年九十六遇**道綽禪師**著安楽集講観経。(863b22～23) ②諸方問**道綽**有余能。(883a10)
善導に関する記述	①疑氷未泮遂謁**善導**用決猶予。**導**曰。子伝教度人。為信後講為渉茫無詣。感曰。諸仏誠言不信不講。**導**曰。若如所見令念仏往生。豈是魔説耶。子若信之至心念仏当有証験。乃入道場三七日不覩霊瑞。感自恨罪障深。欲絶食畢命。**導**不許。(738c15～20) ②自昔華厳帰真於嵩陽**善導**瘞塔於秦嶺。(766b23～24) ③見物放光遂探取為何経法。乃**善導**行西方化導文也。(867b24～25)

	④遂之長安**善導**影堂内乞願見**善導**。(867b28～29) ⑤時号後**善導**焉（867c20） ⑥**善導**同此作仏事。(867c25～26) ⑦其道与**善導**少康異時同化也。(890b25)
著作集	**『往生西方略伝』（元禧元（1017）年）（『唐朝京師善導和尚類聚伝』所収、『金沢文庫資料全書』巻4）**
道綽に関する記述	
善導に関する記述	①唐朝**善導和尚**未詳氏族　伝云阿弥陀仏化身　自至長安聞流水声　和尚乃曰可教念仏　遂立五会教　広行勧化　人有至信者見和尚念仏　仏従口出　三年之後満長安城、人皆受化念仏事具別伝後有法照大師　即善導後身也（206） ②因**善導和尚**勧人念仏　満長安断肉人無買者　遂持刀詣寺意欲与害　和尚見之指現西方即便発心誓捨身命求生浄土（213）
著作集	**『新修往生伝』（元豊7（1084）年）（『続蔵』巻78所収）**
道綽に関する記述	①**道綽**　并州人。棄家已来歴訪名師。後聞殢禅師理行兼著卑志事之。尋憩石壁谷玄忠寺。寺即後魏曇鸞法師旧止也。鸞於其寺久濫浄業。至其亡日畳有祥異。郡人奇之。揩摭其事刻之於石。**綽**読其文弥深信。講涅槃経二十余遍。毎歎鸞法師智徳高遠尚捨講説。修浄土業已得往生。況我小子所解何足為多而恃此為徳。即捨講説修浄土行。一向専念阿弥陀仏。日別七万遍為限。礼拝供養相続無間。為開悟有縁毎講観経二百余遍。示誨道俗。七歳已上念阿弥陀仏。教用小豆為数。上者念得九十八十石。中者念得五十石。下者三十石。教諸有縁。不向西方大小便利涕唾。不背西坐。夕相注弘浄土業。毎見仏住空中。天華下散大如銭。其色鮮白遍満虚空。大衆以手承花。夕皆得七日不萎。又撰安楽集両巻。見行於世。唐貞観三年四月八日道俗集其寺。示如来之降生也。且見鸞於空中乗七宝船。由其上而指**綽**曰。汝於浄土堂宇已成。但惟報命未尽。爾復見化仏与化菩薩飄飄在空。衆乃驚歎大生信服。雖夫無種闡提之人亦率服之。以故唐初并汾諸郡重漬浄業由綽盛焉。貞観十九年四月二十四遇疾。道俗省覲者不可勝記。至二十七日欲終時。又有聖衆従西方来。両道白光入房徹照。終訖乃滅。又欲殯時復有異光於空中現。殯訖乃止。復有紫雲於塔上三度現。衆人同見斯瑞(中巻歟出類聚浄土五祖伝)。(163b6～c8) ②唐貞観中。見西河**綽禅師**行方等懺。及浄土九品道場講観経（163c10～11） ③初聞**綽禅師**晋陽開闡欲不遠千里従而問津（164b11） ④遂出抗進程至**綽禅師**所展会夙心。**綽公**即授与無量寿経。導披巻詳之（164b14～15） ⑤**綽**歎其深詣。因請入定観当得生否。(164b19) ⑥**綽公**静思往咎（164b24） ⑦遇**道綽禅師**。以浄土誘掖未悟（156a15） ⑧**道綽禅師**安楽集三巻（162b24） ⑨巻中十**道綽**(道撫附)　巻中**道綽**(出于五祖伝)（165b19）
善導に関する記述	①**釋善導**　不悉何許人。周遊寰寓求訪道津。唐貞観中。見西河綽禅師行方等懺。及浄土九品道場講観経。**導**大喜曰。此真入仏道之津要。修余行業。迂僻難成。惟此観門速超生死。吾得之矣。於是篤勤精苦若救頭然。続至京師。激発四部弟子無問貴賤。彼屠沽輩亦撃悟焉。**導**入堂則合掌胡跪。一心念仏非力竭不休。乃至寒冷亦須流汗。以此相状表於至誠。出即為人説浄土法。化諸道俗。令発道心修浄土行。無有暫時不為利益。三十余年無別寝処。不暫睡眠。除洗浴外会不脱衣。般舟行道。礼仏方等。以為己任。護持戒品。纖毫不犯。会不挙目視女人。一切名利無心起念。綺詞戯笑亦未之有。所行之処。争申供養。飲食衣服四事豊饒。皆不自入并将廻施。好食送大厨。供養徒衆。唯食麁悪纔得支身。乳酪醍醐皆不飲噉。諸有嚫施将写阿弥陀経。十万余巻。所画浄土変相三百余堵。所在之処。見壊伽藍及故塼塔等。皆悉営造。然灯続明歳常不絶。三衣瓶鉢不使人持洗。始終無改化諸有縁。毎自独行不共衆去。恐与人行談論世事妨修行業。其有暫申礼謁聞説少法。或得同預道場親承教訓。或会不見聞披尋教義。或展転授浄土法門。京華諸州僧尼士女。或投身高嶺。或寄命深泉。或自墮高枝。焚身供養者略聞四遠。向百余人。諸修梵行棄捨妻子者。誦阿弥陀経十万至三十万遍者。念阿弥陀仏日得一万五千至十万遍者。及得念仏三昧往生浄土者。不可知数。或聞**導**曰。念仏之善生浄土耶。対曰。如汝所念遂汝所願。対**已導**乃自念阿弥陀仏。如是一声則有一道光明従其口出。十声至百声光亦如此。**導**謂人曰。此身可厭。諸苦逼迫。情偽変易無暫休息。乃登所居寺前柳樹。西向願曰。願仏威神攝以接我。観音勢至亦来助我。令我此心不失正念不起驚怖不於弥陀法中以生退墮。願畢於其樹上。投身自絶。時京師士大夫傾誠帰信咸収其骨以葬。高宗皇帝知其念仏口出光明。又知捨報之時精至如此。賜寺額為光明焉（163c9～164a23） ②唐往生高僧**善導**　臨淄人也。幼投密州明勝法師出家。誦法華維摩。忽自思曰教門非入一道一途。若不契機功即徒設。於是投大蔵経。信手探之得無量寿観経。便喜誦習於十六観。恒諦思惟忖節西方以為冥契。欣恵遠法師勝躅。遂往廬山観其遺範。乃豁然増思。自後歴訪名徳。幽求妙門。功徹理深未有出般舟三昧者。畢命斯道後遘跡終南悟真寺。未逾数載。観想忘疲已成深妙。便於定中。備観宝閣瑤池金座宛在目前。涕泗交流挙身投地。既獲勝定随方利物。初聞綽禅師晋陽開闡欲不遠千里従而問津。時逢玄冬之首。風飄落葉塡満深坑。遂挈瓶鉢入中安坐。一心念仏不覚已度数日。乃聞空中声曰可得前行。所在遊履無復罣礙。遂出抗進程至綽禅師所展会夙心。綽公即授与無量寿経。**導**披巻詳之。比来所。睹宛在。因即入定七日不起。或問**導**曰。弟子念仏。得往生否。**導**令弁一茎蓮花。置之仏前。行道七日花不萎悴即得往生。依之七日果然花不萎黄。綽歎其深詣。因請入定観当得生否。**導**即入定須臾報曰師当懺三罪方可往生。一者。師嘗安仏尊像。在檐牖下自処深房。二者。驅使策役出家人。三者。営造屋宇損傷虫命。師宜於十方仏前懺第一罪。於四方僧前懺第二罪。於一切衆生前懺第三罪。綽公静思往咎。皆曰不虚。於是洗心悔謝訖而見**導**。即曰師罪滅矣。後当有白光照燭。是師往生之相也。**導**化洽京輦道俗帰心者如市。後於所住寺院中。画浄土変相。忽催令速成就。或問其故則曰。吾将往生。可住三両夕而已。忽然微疾掩室怡然長逝。春秋六十有九。身体柔軟。容色如常。異香音楽久而方歇。時永隆二年三月十四日(同前。中巻第二十六人歟)。(164a24～164c8) ③前而探取之。乃**善導**昔為西方化道文也（157c22） ④**善導**遺像昇於空中。謂康曰。汝依吾事利楽有情。則汝之切。同生安楽（158a1～2） ⑤為**後善導**焉（158a18）

	⑥**善導和尚**二十四讃并一行礼文等（162c4） ⑦巻中十五**善導**　巻中廿五**善導**(出于五祖伝)　巻中廿六**善導**(出于五祖伝)（165b24～25）
著作集	**『龍舒増広浄土文』（紹興30（1160）年）（『大正蔵』巻47所収）**
道綽に関する記述	①西河**綽禅師**浄土九品道場。（266c11）
善導に関する記述	①九唐僧**善導**（252c1） ②**善導和尚**臨終往生正念文（254a21） ③唐京師僧**善導**　**善導**貞観中見西河綽禅師浄土九品道場。於是篤勤精苦。若救頭然。毎入仏堂合掌胡跪一心念仏。非力竭不休。雖寒氷亦須流汗以表至誠。出即為衆説浄土法門。無暫時不為利益。三十余年不暫睡眠。般舟行道礼仏方等専為己任。護持戒品纖毫不犯。未嘗挙目視女人。絶意名利遠諸戯笑。所行之処浄身供養飲食。衣服有余並以廻施。好食送大厨供衆。麁悪自食。乳酪醍醐皆不飲噉。諸有嚫施用写阿弥陀経十万余巻。図浄土変相三百余。譬見及壊塔。皆悉修営。然灯続明。毎歳不絶。三衣瓶鉢不使人持洗。始終無改。不与衆同行。恐談世事妨修行業。展転授浄土法門者不可勝数。或問**導**云。念仏之善生浄土否。答云。如汝所念。遂汝所願。於是導自念阿弥陀仏。一声則有一道光明。従其口出。十声以至百声。光明亦如此。其勧化偈云。漸漸鶏皮鶴髪。看看行歩蹤踵仮饒金玉満堂。難免衰残老病。任是千般快楽。無常終是到来。唯有径路修行。但念阿弥陀仏。後謂人曰。此身可厭。吾将西帰。乃登寺前柳樹。投身自絶。高宗見其念仏口出光明。又捨身時精至如此。賜寺額為光明。本朝慈雲式懺主略伝云。阿弥陀仏化身至長安。聞漉水声乃曰。可教念仏。三年後満長安城中念仏。後有法照大師。即**善導**後身也（266c10～267a7） ④乃**善導**西方化導文也。（267b22） ⑤遂至長安**善導**影堂。大陳薦献。**善導**於空中曰。汝依吾事利楽有情。則汝之功同生安養。（267b24～267b26） ⑥**善導和尚**臨終往生正念文……（287a29～c10）
著作集	**『楽邦文類』（慶元6（1200）年）（『大正蔵』巻47所収）**
道綽に関する記述	①**道綽禅師**撰安楽集三巻（168b16～17） ②如**道綽**善導者。累復有焉。（169b12～13） ③見西河**綽禅師**九品道場講誦観経。（192c26～27） ④後継有曇鸞道珍懐感懔玉**道綽**善導之願行。（208c18～19）
善導に関する記述	①下半巻別以偈頌礼讃西方。及懺悔発願等文。下巻**比丘善導**揀示専修西方要義。及集記諸祖六時礼讃浄土偈頌等（151b9～12） ②**善導**釈曰。身礼拝彼仏。口称揚彼仏。意観察彼仏。三業真実故名至誠心。以真実信心。信知自身具足煩悩流転三界。信知弥陀本願称名下至十声得生。乃至一念無有疑心。故名深心。凡所作為一切善根。悉皆廻願往生。故名廻向発願心。具此三心。必得生也。若少一心。即不得生（154c23～29） ③**善導**弥陀道場讃　同前（165c11） ④**善導和尚**。立五会教勧人念仏。造観経疏一巻二十四讃六時礼文各一巻。（168b17～19） ⑤如道綽**善導**者。累復有焉。余以像季之余。値仏遺法。緬懐浄業。其亦有年。毎以前賢事跡散於諸伝。淪於異代。不得類例相従條然以見。（169b12～15） ⑥復見**善導和尚**専雑二修。若専修者。百即百生。若雑修者。万千一二。心識散乱。観行難成。一志専持四字名号。幾生逃逝。今始知帰。（170b8～10） ⑦**善導和尚**弥陀道場讃　同前　東峯壇級石嵯峨　十仏随声信不訛　後**善導**依**先善導**　今弥陀是古弥陀　一心正受超三界　孤月澄輝照万波　乗般若舟游浄域　度生還亦到娑婆　道場在厳州烏龍山。後**善導**即少康法師也（181b26～181c2） ⑧是故後世言浄社者。必以東林為始。厥後**善導**懐感。大闡於長安。（187a21～22） ⑨**善導**衆生忻楽起信。（188a21） ⑩此道者乃有五師。一曰**善導師**。（192c21） ⑪一**善導師**者。不知何許人。唐貞観中見西河綽禅師九品道場講誦観経。**導**大喜曰。此真入仏之津要。修余行業。迂僻難成。唯此観門。速超生死。於是篤勤精苦。若救頭然。続至京師。撃発四部。毎入仏室。胡跪念仏。非力竭不休。雖寒氷亦須流汗。出即為人説浄土法。三十余年。不暫睡眠。般舟行道礼仏方等。諸有嚫施。用写弥陀経十万余巻。画浄土変相三百余壁。京華道俗。受化者不計其数。或問**導**曰。念仏生浄土耶。答曰。如汝所念遂汝所願。於是**導**乃自念如是。一声則有一道光明。従其口出。十至千百。光亦如之。後謂人曰。此身可厭。諸苦変易。乃登柳樹。向西願曰。願仏接我。菩薩助我。令我不失正念。不生退墮。言已投身自絶。高宗知其口出光明精至如此。賜寺額為光明焉。天竺往生略伝曰。阿弥陀仏化身。自至長安。聞漉水声。**和尚**乃曰。可教念仏。遂広行勧化。三年後満長安城。皆悉念仏。後有法照大師。即**善導**後身也（192c26～a15） ⑫見殿内文字累放光明探取之。乃**善導**西方化導文。康曰。若於浄土有縁。当使此文再発光明。言未已光乃閃爍。康曰。劫石可磨。我願無易矣。遂至長安**善導**影堂。大陳薦献。倏見**善導**遺像。升於空中謂曰。汝依吾事利楽有情。則汝之功同生安養。（193b9～193b14） ⑬世称**後善導**者。即師是也（193b27～28） ⑭昔**善導**化人有曰。若人欲速得往生。応起無間修。所謂恭敬礼拝称名讃嘆憶念観察廻向発願心心相続。不以余業相間故。曰無間修。又若貪瞋癡来間者。但随犯随懺。不令隔念隔日隔時。常使清浄亦名無間修。若能畢命。誓不中止。決定往生。（196a21～26） ⑮浄業専雑二修　京師**比丘**　**善導**（197c5） ⑯臨終正念訣　京師**比丘**　**善導**（197c15） ⑰後継有曇鸞道珍懐感懔玉道綽**善導**之願行。（208c18～19） ⑱浄業専雑二修　京師**比丘善導**･･･（209c29～） ⑲臨終正念訣　京師**比丘善導**･･･（213a4～） ⑳勧化径路修行頌　京師**比丘**　**善導**（214a29） ㉑化徑路修行頌　京師**比丘**　**善導**･･･（219b6～）

	㉒京師**善導和尚**　画三百壁浄土相　写十万巻弥陀経　貴賤不論皆激勧　況登高柳定祈生（225a19～21） ㉓**善導**可嗟今已往。化来老少皆帰嚮。仏念一声分一鍼。声纔響。一声一仏虚空上。八万四千奇妙相。光明寿命皆無量。金色臂垂千万丈。鵝王掌誓来迎接帰安養（227c22～25）
著作集	**『楽邦遺稿』（嘉泰4（1204）年）（『大正蔵』巻47所収）**
道綽に関する記述	①唐**道綽禅師**嘗著安楽集三巻述讃西方。（234b5） ②西河**綽禅師**等。因見鸞公得生浄土各率有縁専修浄業。**綽公**又撰西方記験。名安楽集。行于世此伝見大蔵養字函（235b19～21）
善導に関する記述	
著作集	**『仏祖統紀』（咸淳5（1269）年）（『大正蔵』巻49所収）**
道綽に関する記述	①見西河**綽禅師**九品道場講誦観経。（263a22～23） ②唐壁谷**道綽法師**（271c17） ③**道綽**。入壁谷玄中寺曇鸞之旧居也。専志念仏。日以七万遍為度。勧并汾人念仏。或以豆記所度者及万斛。四月八日集道俗為如来生朝慶会。俄見鸞空中乗七宝船謂**綽**曰。汝浄土堂宇以成。衆復見化仏菩薩飄飄在空。皆忻仰歎異。同志道撫者毎相見必指浄土為会。綽亡三日。撫聞之曰。吾常期先行。今乃在後。吾加一息之功。見仏可追矣。即於像前叩頭陳露。退就其座而化（274c9～18） ④年九十遇**綽禅師**聞浄土之法（275b20～21） ⑤従**綽禅師**授無量寿経。入定七日。**綽**請観所生処。…**綽**静思往咎洗心悔謝久之。道因定出。（276b14～20） ⑥**綽禅師**九品道場講誦観経。（365b19～20）
善導に関する記述	①祖長安光明法師　**善導**云是弥陀化身（260ｃ21） ②四祖長安五会法師 法照**善導**後身。師承遠師（260c22） ③法師**善導**。不知何処人。唐太宗正観中。見西河綽禅師九品道場講誦観経。大喜曰。此真入仏之津要。修余行業迂僻難成。唯此観門速超生死。於是勤篤精苦尽夜礼誦。続至京師撃発四部。毎入室互跪念仏。非力竭不休。雖時寒氷亦須流汗出。則為人演説浄土法門。三十余年不暫睡臥。般舟行道方等礼仏。護持戒品纖毫不犯。好食送厨粗悪自奉。乳酪醍醐皆不経口。凡有嚫施用写弥陀経十万巻。画浄土変相三百壁。壊寺廃塔所至修営。然灯続明常年不絶。三衣瓶鉢不使人持。行不共衆恐談世事。長安道族伝授浄土法門者不可勝数。従其化者至有誦弥陀経十万至五十万巻者。念仏日課万声至十万声者。或得入念仏三昧。往生浄土者莫能紀述。或問念仏生浄土耶。師曰。如汝所念遂汝所願。乃自念一声有一光明従其口出。十至於百光亦如之。其勧偈曰。漸漸鶏皮鶴髪。看看行歩龍鍾。仮饒金玉満堂。豈免衰残老病。任是千般快楽。無常終是到来。唯有径路修行。但念阿弥陀仏。後忽謂人曰。此身可厭吾将西帰。乃登柳樹向西願曰。願仏接我菩薩助我。令我不失正念得生安養。言已投身自絶。高宗知其念仏口出光明捨身精至。賜号其寺曰光明（263a22～b18） ④後有法照法師。即**善導和上**也（263b21） ⑤見殿中文籍放光。探之乃**善導和上**西方化導文。（264b5～6） ⑥遂至長安光明寺**善導和上**影堂。（264b8） ⑦後人多指師為後善導云（264b27） ⑧因善導和上勧人念仏。（288c10） ⑨十五年。善導法師至西河見綽禅師九品道場講誦観経。喜曰。此入仏之津要也。修余行業迂闊難成。唯此観門速超生死。至京師撃発四部三十余年。般舟行道。造弥陀経十万余巻。尽浄土変相三百余壁。満長安中並従其化。有終身誦弥陀経十万至三五十万巻。日課仏名一万至十万声者。師念仏時有光明従口出。後高宗朝。賜寺名曰光明云（365b19～27） ⑩二十一年十月三日。新定沙門少康放光而逝。初師至洛下白馬寺。見殿内文書放光探之。乃**善導和上**西方礼文。遂至長安光明寺影堂大陳薦献。倏見**導師**遺像升空中。而言曰。汝奉吾教以利有生。則汝之功必生安養。（380b1～6） ⑪唐太宗。**善導法師**至京師造弥陀経十余万巻。尽浄土変相三百余壁。満長安中並従其化云云。（469b14～16）

㊲　上記の表は、中国の文献における道綽・善導に関する記述を年代順に表にしたものである。文献の成立年代は、『大蔵経全解説大事典』（雄山閣出版・1998年）の記載に拠った。表の作成基準として、道綽伝・善導伝があるものをまず挙げ、他の仏教者の伝記内でも道綽・善導と名のある者をその次に列挙した。